原典資料紹介：『プラートの聖母マリアの帯の歴史：Historia Cinguli sanctae Mariae de Prato』

金　原　由紀子

A Study and Translation of the "Historia Cinguli sanctae Mariae de Prato"

KANEHARA Yukiko

Abstract

At the Pieve of Santo Stefano in Prato, Italy, the cult of the Vergin and her Sacred Belt became popular from the third quarter of the thirteenth century and "Historia" was edited to prove the history and authenticity of the relic. Under the "Historia", the subject of <<Assumption of the Vergin in the giving the Belt to Thomas>> was often painted and sculpted at the Pieve from the late thirteenth century to the fifteenth century. Although the original text of the "Historia" is lost, the first half of the "Historia Cinguli sanctae Mariae de Prato" (Magliabechiano XXXVII, 323), a fifteenth-century manuscript in the National Central Library of Florence, is considered to be very similar to the original. It contains "De Transitu Beatae Mariae Virginis" of pseudo John of Arimatea, which is a sixth-century text, the story of the trip of the Sacred Belt to Prato and seven miracles. The second half of "Historia Cinguli sanctae Mariae de Prato" tells the theft and the miracle of the relic in 1312, the document of the trial and the keeping of the Belt. This latter part must have been added to the original text after 1312. I am convinced that this translation of "Historia Cinguli sanctae Mariae de Prato" is significant to clarify the relationship between the cult of the Sacred Belt and the works of art from the late thirteenth century to the fifteenth century at the Pieve of Santo Stefano.

Key word：Prato, Sacra Cintura, Sacred Belt

[要約]

イタリアの小都市プラートのサント・ステファノ聖堂では、聖母の帯の聖遺物崇拝すなわち聖帯崇拝が13世紀第3四半世紀より盛んになり、聖帯の来歴とその正統性を裏付ける文献として『聖帯の歴史』が編纂された。そして、同聖堂では13世紀末から15世紀にかけて、そのテキストを典拠として《聖母被昇天と使徒トマスへの聖帯の授与》の主題が頻繁に造形化された。オリジナルの版の『聖帯の歴史』は現存しないが、フィレンツェ国立中央図書館所蔵の15世紀のラテン語写本『プラートの聖母マリアの帯の歴史』(Magliabechiano XXXVII, 323)の前半部のテキストは、オリジナルの版とほぼ一致すると考えられる。同写本の前半部は、聖母被昇天について述べた最古のテキストである６世紀頃の東方の偽書『聖母の帰天』、聖帯のプラートへの到着の伝説、7つの奇蹟を含み、後半部は1312年に起きた聖帯の盗難と奇蹟、

裁判記録と聖帯の管理について記している。後半部は、同年以降にオリジナルのテキストにつけ加えられたに違いない。プラートの聖帯崇拝の様相と13世紀末から15世紀の美術作品の関係を解明する一助とするために、本稿では本写本の邦訳を試みる。

キーワード：プラート、聖母の帯、聖帯、

中部イタリアの小都市プラートのサント・ステファノ聖堂には、聖母が被昇天の際に使徒トマスに与えたという帯の聖遺物が12世紀末に寄進されたと伝えられる。この帯の聖遺物崇拝すなわち聖帯崇拝は13世紀第3四半世紀より盛んになり、同聖堂では13世紀末から15世紀にかけて《聖母被昇天と使徒トマスへの聖帯の授与》の主題が絵画・彫刻・ステンドグラスとして頻繁に造形化された[1]。その際に、聖帯崇拝の普及および造形作品の典拠として重要な役割を果たしたのが、聖帯の由来を物語る伝説のテキスト『聖帯の歴史』である。『聖帯の歴史』は13世紀第3四半世紀頃に編纂されたと推測されるが、オリジナルの版は現存しない。だが、本稿で邦訳を試みたフィレンツェ国立中央図書館所蔵の15世紀のラテン語写本『プラートの聖母マリアの帯の歴史Historia Cinguli sanctae Mariae de Prato』(Magliabechiano XXXVII, 323)[2]の前半部のテキストは、オリジナルの版とほぼ一致すると考えられる[3]。

この写本は12枚の紙が3束に綴じられて24葉を構成しており、第21葉の裏から第23葉の裏までは白紙となっている。表紙には本文と同じ書体で "di Fra(n)c(esc)o (?) Benci"と記されており、裏表紙には"De cingulo b(eate) Mariae Virg(inis)."と書かれている。書体はウマニスティカ・コルスィーヴァで、章ごとのタイトルは赤インクで記されている。内容的には、第16葉の裏の最終行を境に二分できる。前半部は、6世紀頃に東方で記されたアリマタヤのヨセフの偽書『聖母の帰天Transitus Mariae』[4]をそのまま引用して聖母被昇天について叙述し、聖帯のプラートへの到着と最初の7つの奇蹟を収録した最も古い形の伝説を筆写している。第17葉の表から始まる後半部は、1312年に起きた聖帯の盗難と奇蹟、裁判記録とその後の聖帯の管理について記しており、同年以降にオリジナルのテキストにつけ加えられたと考えられる。

本写本は史料的に重要な情報を数多く含むにも関わらず、これまで詳細な分析が行われてこなかった。従って、プラートの聖帯崇拝の様相と美術作品の関係を解明する一助とするために、本稿では本写本の邦訳を試みる。聖書からの引用句については出典を明示し、同時代の史実を示唆する箇所には出来る限り註を付けるよう務めた。紙数に限りがあるため、テキストの詳細な分析、他の版のテキストとの比較、史料により確認し得る史実との関連などの諸問題については改めて別の機会に論じることとしたい。

*　　*　　*

『聖母マリアの死と、彼女の被昇天に際してどのようにこの世界に帯を残したのか、最後にこれがどのようにしてトスカーナのプラートの地に残り、悪魔によりいくつかの奇蹟をもって示現されたかがこれより始まる』。

すべてを予見し、書物が有用で必要であることをご存知であった全能の神は、ご自身の手で書かれた法をモーゼにお渡しになった。故に、書物の有用性は古い時代から知られていた

ものであり、すべての人に知られ、すべての人によって認められている。詩篇作者が「天において、地において、主は何事をも御旨のままに行われる」[5]と述べているように、万物を創造された神自身、神の存在を信じる信者たちの信仰を強固にする目的で、適当な時機に行なうようにいくつかのことを先に延ばされた。そこで今、栄光に満ちた神の母、常に処女であったマリアの名誉と栄光のために、イエス・キリストの遺体を私の墓に納め、被昇天されるまで常に聖母と共にいた私アリマタヤのヨセフは、聖母がどのように天に昇られ、その時に巻かれていたベルトあるいは帯を後世の人々へのしるしとしてどのように残されたかを簡潔に語ることにした。

さて、主イエスが受難に向かわれる前に、彼の母は自分の魂が肉体から離れる時を3日前に知ることができるようにと恭しく彼に頼んだ。すると、主は彼女に「私の受難と復活の後、40日後に私が天に昇る時を預言者たちを通じて予言し、後に私の弟子たちに告げたように、天使と大天使と聖者と聖処女を伴って私があなたの所を訪れるのを目の当たりにした時に天に行くことを知りなさい」と言われた。彼女はこれを聞くと、頼んだことをすぐに行って下さったことから、息子イエス・キリスト、天と地の創造主を賛美し、祝福した。我らが主イエス・キリストの昇天の翌年、聖母マリアは昼も夜も常に祈っていた。本当に、死の3日前に彼女の所に主の天使が来て、挨拶して言った。「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたと共におられます」。すると、彼女は「神に感謝します」と答えた。天使は彼女に「神があなたに授けたこの棕櫚を受け取りなさい」。彼女はその棕櫚を受け取りながら神に感謝した。天使は彼女に「3日後にあなたの被昇天が起こるでしょう」[と伝えた]。そこで、彼女は神に感謝した。彼女は私ヨセフ、主の他の弟子たちと女弟子たち、親戚と友人を呼び、そこにいた人々すべてに自分の死について告げた。そして、身を清めて相応しい服を身に着け、息子の到着を待ち、自分を見守って慰めを与えてくれるよう全親戚に頼んだ。その時、3人の処女セフォラ、アビジェナ、エカエルも彼女と共にいた。だが、我らが主イエス・キリストの弟子たちは世界中に散っていた。第3時[6]に雷鳴、稲妻、地震、穏やかな雨を降らす大きな雲が到来した。そして、使徒であり福音書記者であるヨハネがエフェソスから突然運ばれて来て、[部屋に]入ってきて挨拶して言った。「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたの共におられます」。すると、彼女は「神に感謝します」と答え、身を起こしながら喜んで聖ヨハネを迎えた。聖母マリアは言った。「ああ親愛なる息子よ、なぜあなたは私をこんなに長い間放っておいたのですか。あなたは主が十字架に掛けられた時に命じられたように、私の世話をするようにというあなたの師の命令に従いませんでした」。すると、彼は跪いて許しを乞うた。聖母マリアは彼を敬意をもって抱擁し、祝福した。そして、彼がどこから着いたのかあるいは何のためにエルサレムに来たのかを尋ねようと思っていると、ディディモと呼ばれたトマスを除く主のすべての弟子が聖母マリアの部屋の扉の前に雲によって運ばれて来た。彼らは部屋に入りながらこのような言葉で貴婦人に挨拶した。「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたの共におられます」。そして彼女を崇めた。彼女は驚いて即座に立ち上がってお辞儀をし、神に感謝しながら然るべき愛情をもって彼らを迎えた。以下は、雲で運ばれて来た主の弟子たちの名である。福音書記者ヨハネ、その兄弟のヤコブ、ペトロ、パウロ、アンデレ、ピリポ、アル

パヨのヤコブ、ルカ、バルナバ、バルトロマイ、マタイ、ユストと呼ばれたマッテヤ、カナンのシモンとユダ、マルキアリス、ニコデモとマッシミアヌス、そして数え切れないほど多くの他の者。それから、聖母マリアはその兄弟たちに言った。「あなた方全員がエルサレムへ来たのはどうしてですか」。ペトロが答えて言った。「これをあなたに尋ねなければならなかったのは私達なのに、あなたが私達に問いかけました。私が思うに、どうしてすごい速さでここに来たのかはおそらく誰も知りません。今日、私はアンティオキアにいましたが、今はもうここにいます」。同じように全員がその日にどこにいたかを話すと、その話を聞いて、そこに居合わせたすべての者は驚いた。聖母マリアは彼に言った。「私の息子、主が受難に行かれる前に、私は彼とあなた方が私の死に立会って下さるようお願いしました。主は私にこの恵みを与えて下さり、明日、私に死が訪れるでしょう。起きていて私と共に祈って下さい。主が私の魂を取りに来られる時、あなた方が起きているのを主がご覧になるように」。すると、全員が起きていることを約束し、寝ずに詩篇と頌詩を歌い、無数の明かりを灯して一晩中祈っていた。日曜日が来て、第三時になると、聖霊が明るい雲として使徒たちの上に降臨した時のように、自然光と甘い香りが漂い、キリストが多数の天使と共に降臨し、彼の最愛の母の魂を取り上げ、天使たちが以下のように記されている雅歌を歌った。「おとめたちの中にいるわたしの恋人は茨の中に咲きいでたゆりの花」[7]。そして、キリストがタボル山で使徒たちを前にして変容した時に彼らが倒れたように、そこへ行った全員が顔から倒れ、1時間半の間、誰も起き上がることができなかった。だが、光が弱まると、この光と共に聖母の魂が詩編と頌詩と雅歌[の合唱]を伴って天に昇り、光が見えなくなると全大地が震えた。一瞬のうちに、エルサレムの全住民が聖母マリアの死をはっきりと知った。すると悪魔が住民に憑き、彼らは彼女の遺体に何をするかを考え始め、彼女の遺体を燃やし、使徒たちを殺すために武器をとった。というのも、彼らの罪と民の協定のせいで起きたイスラエルの民の離散を、彼女のせいだと考えたからである。だが、彼らは頭を壁にぶつけ、お互いにぶつかり合い、失明に襲われた。その時、強い輝きに驚いた使徒たちは、神の母マリアの死に立会うという光栄を彼らにかなえて下さった神を賛美し、祝福しながら起き上がった。そして、高貴な人の遺体を埋葬するユダヤ人の習慣に倣い、彼女の遺体を衣とベルトすなわち帯と他の装飾品で飾り、詩篇を歌いながら聖なる遺体をシオン山からヨシャファトの谷へ運んだ。

だが、ある者が書いているにはルベンという名のユダヤ人がおり、彼は聖母マリアの遺体の入った棺を地面に投げようと考えていたが、道程の半ばまで来たところで彼の両手が一瞬で肘まで萎えてしまい、泣きながら否応無しにヨシャファトの谷まで降りた。というのも、彼の両手は萎えて自分の方に引っ込めることもできなかったからである。すると、彼は弟子たちに祈りによって助けてくれるように頼み、キリスト教徒になることを約束した。使徒たちが跪いて彼が自由になるように主に祈ると同時に彼は自由になり、神に感謝して天の女王とすべての使徒たちの足に接吻し、洗礼を受け、我らが主イエス・キリストの名を伝え始めた。

それから、使徒たちは大いなる敬意をもって、大きな愛と優しさのために泣きながら、そして歌いながら、豪奢な輝きで飾られた彼女の栄光に満ちた遺体を墓に置いた。突然、天の

光が彼らを包み、彼らが地面に倒れている間に聖なる遺体が天使たちによって天に上げられた。

『聖母マリアは天使たちによって天に上げられながら、どのように自分の帯を被昇天のしるしとして聖トマスに投げたか』。

その頃、使徒トマスは突然オリーブ山へ連れて来られ、聖なる身体が天に向かっていくのを見て、彼女に向かって叫び始めた。「聖なる母、無原罪の母、恵まれた母よ、もしも私があなたの前で恩寵を受けたのならば、あなたの聖なるお慈悲によって、あなたの僕である私を喜ばせて下さい。私が他の人に証拠として見せることができるように、あなたの被昇天のしるしを私にお与え下さい」。すると、使徒たちが彼女の身体に巻いたベルトあるいは帯が天から使徒トマスに投げられた。彼はそれを受け取って接吻して神に感謝すると、ヨシャファトの谷に行き、輝きを見て心を打たれていたすべての使徒たちと他の大勢の人々に会った。会った者たちは互いに接吻し合った。そして、聖ペトロは彼に言った。「あなたは本当にいつも頑固で懐疑的だ。神はあなたの不信のために、我らが主イエス・キリストのそして救世主の母の埋葬にあなたが私たちと共にいることを好まなかったのだ」。彼は深く心を打たれながら言った。「わかっています。そして、あなた方全員に私の頑固さと不信について許しを乞います」。すると、全員が彼のために祈った。それから聖トマスは彼らに言った。「彼女のご遺体をどこに置いたのですか」。彼らは墓を指さした。すると彼は言った。「彼女の聖なる身体はここにはない」。全員がひどく悲しみ、非常に驚いた。そして、ペトロは彼に言った。「あなたは前にも自分の指で主に触れて見るまでは、我らの師、主の復活を信じようとはしなかった。あなたはどうすれば聖なる遺体がここにあると信じることができるのか」。しかし、トマスは主張して言った。「ないのだ」。そこで、彼らは岩に堅固に掘られた墓に近づいて石をどけたが、彼女の遺体は見つからず、トマスの言葉に打ち負かされたので何と言えばよいのかわからなかった。それから、聖トマスは北インドでどのようにミサを行なっていたかを彼らに伝えた。神の意志によってどのようにしてオリーヴ山へ連れて来られたかも知らず、いまだ司祭の服を着たままであった。そして、聖母マリアの神聖な身体が天に昇るのを見て、彼に祝福を与えて下さるよう彼女に懇願し、その願いを彼女が聞き入れて、巻いていた帯をどのように彼に投げて下さったかを彼らに話し、全員の前で帯を見せた。使徒たちは聖なる身体に自分たちが巻いた帯を見ると、神を称え、聖母そして救世主の母がトマスに与えた恵みゆえに聖トマスに許しを乞うた。彼は聖なる身体が天に昇るのを見たからである。彼はそこにいる全員を祝福して言った。「見よ、兄弟と共にいることは、なんとすばらしく、なんと喜ばしいことか」[8]。そして、ピリポが宦官に洗礼を授けた時にしたように[9]、ハバククが獅子の穴に繋がれたダニエルに食べ物を運んですぐにユダヤへ帰ったように[10]、使徒たちをそこまで運んで来た雲により、それぞれが元の場所に戻って行った。このようにして、使徒たちは神の民をキリスト教に改宗させるためにすぐに戻った。我らが主イエス・キリストもこうして戸が閉じられているのに弟子たちの家へ入り[11]、そして、胎が閉じられているのに処女の胎に入ったのである。

主の受難までは隠れた弟子であり、私の新しい墓にその栄光に満ちた身体を納め、復活後

に会い、主の昇天後に聖母という神殿をお守りした私アリマタヤのヨハネは、私の心の頁にこれらのことを記し、何世紀もの間祝福されてきた方に敬意を表して記述した。

『聖母マリアの帯はどのようにして主の1141年にトスカーナの地プラートに着いたのか』。

使徒たちとエルサレムの物語から、それを述べた人が言うように、聖母マリアの被昇天のために集まった使徒たちはヨシャファトの谷から去る前に、栄光に満ちた処女の聖なる遺体を置いた場所に彼女に敬意を表して聖母を賞賛する教会を建てるよう命じたことが知られている。そのため、聖母が天使によって天に運ばれている間に聖母マリアの帯を彼女から受け取った使徒聖トマスは、それを忠実に保管するために、帯を妻と子を持つある敬虔な男に残した。その男はインドに行く前の同使徒をエルサレムでもてなし、同郷人と共に聖母の墓を訪れたのである。ユダヤ人を恐れて教会はまだ献堂されていなかったので、この保管者は、主への大いなる敬意と畏怖をもってその帯を保管するように自分の子孫に命じた。そして、ある者がその家系の子孫の誰かに教えるという方法で保管していき、ある司祭に渡った。彼は禁欲を公言しなかった東方教会の法に従い、合法的な妻との間にマリアという名の娘をもうけていた。実際、この司祭はエルサレムの神の教会を税によって管理しており、彼の家系で継承してきた聖母マリアの帯を、娘マリアに保管するようにと託した。

このマリアの時代に、ミケーレという名のプラート人がいた。彼はエルサレムへ行き、そこで過ごした間に神の意志によりそのマリアと結婚して一緒になった。そして、彼はそのベルトあるいは帯を彼女と彼女の母親の家で見つけると、大いなる喜びで満たされた。こうして、ミケーレが上述のマリアとベルトを伴って故国に戻ったのは主の受肉の年1101年[12]のことであった。彼は政庁近くの最初の殉教者聖ステファノの聖堂の前にあったプラートの小さな家で正直で敬虔な生活を守り、大きな信仰愛をもって頻繁にその教会および同聖堂の北側に設置されていた聖母の祭壇を訪ねていた。彼は困窮に苦しめられていたので、聖職者たちと俗人たちから軽蔑されていた。帯を持っていると主張しても少しも信用されなかったが、何度も述べてきたその帯で教会を称えたかったので、晩年になってそれを司祭長ウベルトに託そうとした。もっと前にそうする準備をしたのだが、帯のことを決して信じようとしなかった司祭長は受け取りを拒否したのである。こうした理由で、ミケーレは生前に帯を手放すことを望まなかった。実際、先述のマリアと結婚して一緒になった時、結婚は神のご意志により父親には知らせずに行なわれ、彼が語ったように、彼女の持参金として何も受け取らなかった。彼らはお互いに魅かれ合い、互いに愛し合ったので、少女の父親が彼ら2人あるいはどちらかに対して激怒しないように、肉体関係により成し遂げられた彼らの結婚を父親に隠したのである。実際、司祭は気品にすぐれ、豊かな資産を持っていた。ミケーレは姿は優雅であったが、貧しく、外国の地ではよそ者であった。そのため、もしこの結婚が父親の知るところとなったら、彼はこれを自分の不名誉や恥と考えて苦しみのうずきに掻き立てられ、怒りの興奮に捕らわれて、2人あるいは彼らのどちらかを殺すかもしれないと、当然のことながら彼らは恐れたのである。すると、事情を知る少女の母親は、密かに婿を呼んでこのように話した。「あなたは彼女を常に愛していくために、素晴らしい持参金を妻のために受け取りた

いですか」。すると、彼は「欲しいです」[と答えた]。そして、彼女は言った。「あなたに金や銀、お金や宝石をあげるわけではありませんが、どんな代価とも比べようのない非常に尊い物をあなたにあげましょう。もしそれに然るべき敬意を払い、勤勉で忠実な保管者となれば、あなたは地上の財産の豊かさを享受し、永遠の生命という褒美に恵まれるでしょう」。ミケーレは言った。「それは何ですか」。彼女は「私の夫とその先祖が代々父親の死に際して、忠実に保管して血縁の者以外の誰にも見せないと誓ってきた、主イエス・キリストの母マリアの帯です。もし彼がこのことを知ったら、あなた方と共に私にも死の罪を負わせるかもしれません。というのも、聖母マリアは天に昇る時に、真実の証として他の人にそれを見せるようにと、この帯を天から使徒トマスに投げたのです」[と答えた]。これを聞いてミケーレは大いなる喜びに満たされた。帯を受け取り、他には持参金として何も求めなかったが、少女の父親の知らぬ間に帯と妻を伴って逃げ、神の恩寵を道づれとして故郷への帰還を果たした。読んでいる人は理解し、聴いている人は注意を払って欲しいのだが、それ故に、大いなる喜びと配慮をもって得た大切なものを持っていられる限り、彼は非常に価値ある持参金を自分から遠ざけることを絶対に拒んだのである。しかし、保管するに際して絶え間無い不安にとらわれたので、然るべき敬意をもって称えられるようにとプラートの教会に帯を託すことを望んでいた。というのも、彼が言っていたように、それをある大きな貴重品箱に入れて自分の家――その家は彼の死に際して先述の教会に寄進し、後に政庁を拡張しようとしてアルベルティ伯がパンフォッリアの死後に壊した家で、現在はそこにはコムーネの円柱がある――に保管していた。その間、ゴッティフレードという仕事仲間と、彼と共に革なめし業に従事していた多くの徒弟を家に下宿させていたのだが、栄光に満ちた帯への敬意のために夜も昼もそこでランプを灯させ、泥棒への不安のために夜間は常にこの貴重品箱を寝台として使っていたのである。だが、仲間と徒弟たちが驚いたことには、彼が貴重品箱の上で眠気に襲われても、[その後]いつも床に横たわっていた。そのため、神が極めて貴重な物の上で誰かが眠ることを望んでおらず、それ故に教会で眠る者は恐れ、畏敬によって眠りを中断するということを彼は理解した。彼は、失うことを恐ろしいと感じるほどに栄光に満ちたものに度を越えて執着し、いつもその保管のことを心配していた。一方では愛に動かされ、他方では恐れに迫られて、その両者の間で混乱してどうすればよいのかわからなかった。そのため、死に際して否応なく、もらった時に入っていた葦の籠に入れた帯を保管するようにと先述の司祭長に託した。ミケーレは自分の死に際してこの一連の出来事を順序立てて伝えた。そして、彼が死ぬと、仲間のゴッティフレードと若い頃に徒弟だったストラボ・デ・ランドレーシとポルコ・デ・ポルチは、貴重品箱の上で絶え間なく灯していたランプのこと、彼が貴重品箱から落ちて床で眠っているのを何度も見たこと、だがその当時はなぜこうしたことが起こるのかを知らなかったことを、帯のことが明らかになった後にプラートの貴族に知らせた。そこでようやく司祭長ウベルトは、帯をいくつかの聖遺物や宝物と一緒にプラートの教会の戸棚に保管するように命じた。だが、このような聖なる物に対して然るべき敬意を払わなかったので、声、叫び、騒音といった騒ぎが共同寝室で起こり、寝ずの番をしている聖堂参事会員たちが、家全体が崩壊したのではないかあるいは泥棒が侵入したのではないかと恐れた

ほどだった。実際、燭台と吊り香炉が戦うかのように互いにぶつかり合ったので、司祭長は聖堂参事会員たちに対してこのような動揺に配慮したいと考え、彼が身体の病のために居住していた城壁外の民衆の広場の向こうの庭にある小さな家に帯を運ばせた。だが、非常に高貴で計り知れない真珠がこのような悪い状態で保管されることを神はお望みにならなかったので、ある晩、鶏が鳴く頃にその家で激しい火が燃え上がり、そのせいですべてが焼失したかのように見えた。司祭長はプラート市民の襲撃と物品の紛失を恐れたので、彼と共に暮らしていた7人の下男にひそかに家をからにするように命じた。大部分はからにしたが、帯と共にいくつかの物が残されてしまい、炎の妨げのせいですべての物を持ち出すことができなかった。そのため、司祭長と彼らは火事から救い出した物への危険を回避するのに必死になり、夜明け前の鐘をつく守衛たちに騒ぎにならないように物を中庭に運ぶように命じて、火消しが来るのを待った。朝がくると、家も炎もなくなっただろうと思いながら、彼らはやっとのことでその光景に目を向けた。火事の話を聞きつけてそこへ内密に呼ばれた聖堂参事会員たちは、[その話を]信じることができなかった。というのも、彼らの到着前に炎は既に消え、家は火事の痕跡が全くないように見えたからである。それ故、司祭長と一緒にいた下男たちの話が一連の出来事を証言して裏付けなかったら、聖堂参事会員たちは司祭長を全く信じなかっただろう。司祭長と聖堂参事会員たちはこの不思議な事件により畏怖の念を感じ、起こった出来事について自分で慎重に熟考した。そして、ミケーレの話を信じなかったことを悔い、栄誉と然るべき敬意によって不信仰の過ちを贖いたいと望んだ。彼らは聖者たちの遺物の中に聖母の帯を名誉の証として置き、重要な儀式の日には宝物と他の聖者の遺物と共に聖ステファノの祭壇の上に置くように満場一致で命じた。しかし、その帯のことは敢えて公には知らせなかった。というのも、主が帯を通じて後に信徒たちに現されることになる奇蹟が、まだ他の者たちには知られていなかったからである。

『別の奇蹟が続く。主の年1173年の洗礼者ヨハネの斬首の日に、3人の悪魔に憑かれたプラートの女を通じて、どのように聖母マリアの帯がプラートの民衆に示現されたか』。

『悪魔に憑かれた女を通じて示現された帯の奇蹟』

主は彼の母の高貴な帯が信徒たちから称えられることをお望みになったので、不信心者たちの心から疑念を取り除くために、まずプラートの民に対してはっきりと明らかにされた。主の年1173年8月の洗礼者ヨハネの斬首の日に、しばらくの間悪魔に苦しめられていたあるプラートの女がプラートの教会に導かれ、最初の殉教者聖ステファノの祭壇の前に連れて来られた。日課祈祷とミサが終わると、忠実な信仰と精神の誠実さと魂の信心に感動した何人かの聖職者と平信徒と何人かのプラートの聖堂参事会員は、その女が聖霊の恩寵の協力により、聖遺物をかざすことで治癒を得られればと願った。山の上にある町は隠れることができないし、あかりをつけてそれを枡の下に置く者はおらず、入ってきた者があかりを見るようにと燭台の上に置くのだから[13]、彼らが聖なる聖遺物の聖体容器と帯の入った箱を持って来ると、彼らのうちの、その箱を運んできた1人に対して悪魔がこっそりと叫んで言った。「その箱を私の方に持ってこないでくれ。というのも、それからは力が出ており、そこに入っている物

は私をひどく焼き焦がし、私がこれ以上この身体に留まることを許さないのだ」。だが、喜んだその聖堂参事会員は彼に言った。「正直に私に言いたまえ。箱の中にあるものは何か」。だが、悪魔は答えて言った。「それはあなたには言わない。もしそれを知ったらあなたは満足し、あなたにとっては恵みとなるかもしれないからだ」。そこで、長い間こうした言葉で言い争うと、悪魔はこのこと[14]を話し、それを聞いて全員が大きな喜びに満たされた。しかし、聖堂参事会員たちと司祭スクラッタ、市民、助祭が苦しむ身体の上に聖体容器と箱を置いたため、悪魔は聖なる帯の証により転がって吐きながら逃げ出し、その女の身体に憑いていた2人の仲間と共に去った。そこにいた聖職者も平信徒も、涙ぐんだ声でこう述べて神に感謝を伝えた。「主は偉大で、称賛に値し、その偉大さは果てしない。実際、覆われているもので姿を明らかにされないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはない[15]という真実に、誰がかつて抵抗できただろうか」。

『多くのことを予言して明らかにした、フィレンツェのボナフェーデの息子ベネデットという子供に関する別の奇蹟。そして、最後には帯の力により彼から3人の悪魔が、続いて19人の悪魔が出て来て、そのうちの最後の悪魔が多くの秘密を悪人たちの前で明らかにした』。

ちょうどこの頃に、自由学芸の勉強に専念していたベネデットという名の息子を持つフィレンツェ市民、ボナフェーデという男がいた。息子は四旬節の最初から悪魔に苦しめられており、悪魔は聖ヨハネの日にいつもより強い責め苦を与えて荒狂っていた。だが、彼の両親はそのことの真相を司祭たちを通じて明らかにして大病を治癒したいと願い、司祭たちを呼んだ。彼らはやって来て、苦しむ人の上でキリストの名を唱えながら聖水を振り掛け始めた。だが、こうしている時に悪魔は次のように話し始めた。「あなた方はこれで何をしようと思っているのか。あなた方はここから私を追い出すことはできない。私を追い出すものは、3ブラッチャ以下のものだ」[16]。そして、彼らは言った。「あなたが3ブラッチャという物は何か」。悪魔は彼らに「聖母マリアの帯だ」と言った。すると、彼らは言った。「どこにあるのか」。彼は「プラートの民のところにある」[と答えた]。これを聞いたフィレンツェの聖職者と平信徒たちは驚いて言った。「彼が何のことを話しているのかわからないし、そんな話は信じられない」。だが、これを聞いて黙って熟考したその少年の父親は、父親らしい愛に動かされて、フラ・サルヴォという名の修道士に[プラートに]同行してくれるよう頼んだ。こうして、使徒であり福音書記者である聖マタイの祝日に、彼らは先述の息子と共にプラートの最初の殉教者聖ステファノの教会に行った。少年は祭壇の前に連れて来られたが、意志に反して来たので回廊に逃げた。だが、逃走しなかったので捕まり、多くの人の手で引っ張って来られ、ついに祭壇に連れ戻された。彼の身体があの崇拝に値する帯の方に連れて来られると、大きくふくらみ始めた。少年が吐いて泣きわめいている間に、帯をかざしたせいで3人の悪魔が逃げて出て行った。

『悪魔に憑かれた少年が衣類の盗難のことを暴露し、居合わせた悪人たちと民衆の前で過去の数々の悪行についても明らかにした』。

この少年は同じ教会にとどまり、彼の中に隠れていた他の堕落した魂が姿を現して、未来と過去の多くのことを民衆に告げた。そして、その後9日間にわたって、帯を下さった栄誉ある聖母マリアのお蔭で、さらに聖霊の力で、19人の悪魔が先述の憑かれた者から逃げ出した。しかし、その中の最後の悪魔が人間の救済に必要な多くのことを告げた。実際、彼のところに誰かが来ると、「殺人犯よ、あなたは殺人の罪を犯したので、あなたは私のものだ」と言った。それから、別の人に言った。「あなたは姦淫の罪を犯したので、あなたは私のものだ」。また、別の人に言った。「あなたは隠れて父親のことをひどく侮辱した。誰もそれを見ていなかったので知られていないとあなたは信じているが、私はよく知っている。もし聞きたければ私があなたに言おう」。彼はそれを知りたいと思ったので何を言ったのかをたずねると、悪魔は彼に答えて、侮辱の方法と理由を語った。これを聞いて後悔に至り、たくさんの硬貨のつまった袋を少年のところに持って来ると、少年はそれを受け取って硬貨を1枚ずつ配り始めた。居合わせた人々は、少年は悪魔ではなく神の聖霊を宿していると信じ、有り難く受け取った。実際、少年でありながら、文法の教職を長く務めていたかのように非常に洗練された言葉で尋ねる人に答え、すべての出来事に立ち会っていたかのように彼らがした事すべてに言及したので、彼らは驚いた。そして、彼は祈ろうとするかのようにひざまずいて祭壇の方を向いたまま、教会へ来る人の名を、その人が入り口から入って来る前に言い当てた。それを聞いた人々は教会の入り口へと走り、少年が名を挙げた者が来ることを知った。だが、ある者が教会の入り口から入って来ると、すべての民が知っていたようにその者は自堕落だったので、少年はとても満足して笑いながら「今、入ってくる人は私のものだ」と言った。そのため、硬貨を受け取った者たちは、彼が聖霊ではなく悪魔を宿していることに気づき、受け取った硬貨をすぐに返した。だが、少年は受け取ろうとせず、聖霊を宿した神の天使であると熱心に主張して言い添えた。「好きなことを何でも質問しなさい。もし私があなた方に真実を言わなかったら、私を信じる必要はない」。すると、一人の女がルスティコッチョの息子たちの家の入り口がある道を通って、ビゼンツィオ河の脇の用水路にかかる橋の古いベンチのすぐそばに、洗濯物のところに置いた衣類を持って来て、その橋の上に洗濯物を残したまま家族の用で急いで家へ戻るということがあった。そこに、ある邪悪な息子が来ると、誰も見ていなかったので、すべての洗濯物をマントで包み、砦の中にある自分の家へ躊躇せずにこっそりと持って行った。女が戻った時には洗濯物は見つからず、大声で泣き始めた。彼女を慰めようとした者たちは、何度も述べた少年に尋ねるために先程の教会へ彼女を連れて行った。多くの群衆が見守る中で、司祭スクラッタが悪魔に憑かれた者に言った。「邪悪な者よ、すべてを知っていると言う君よ、言いたまえ。今日、誰が盗みを行ったのか。そして、私達が聞こうとしていることは何か」。すると彼は答えた。「洗濯物を盗んだ者は先ほどこの教会で祈り、それから外へ出ていって盗みを働いた」。そして、すべてを順を追って上述の内容どおりに語り、泥棒の名を暴露してこのように言った。「泥棒の家へ行って、ほんの少し前に彼が持ち去ったままの、マントにくるまれた洗濯物を見つけなさい」。そこで、コムーネの使者が行政長官の命令で泥棒の家へ行くと、悪魔の言葉通りに見つかったので、洗濯物を持って泥棒を引っ張った来た。それを聞き、プラートの民は男女の大きな群衆となって、彼を迎え

ようと教会へ駆けつけた。悪魔はこれを見て大声で笑い、大いに喜んで言った。「あなた方に本当のことを言ったのだから、私を信じなさい」。だが、恐怖で驚き、悔恨で考えを変えたプラート人たちは、彼ら同士の争いについて和解し、断食と祈祷に専念しながら、聖堂参事会員が寝ずに徹夜課を勤める間も教会に熱心にとどまった。悪魔は誉れの高い帯のために間もなく出て行くつもりであると、そして他のすべての仲間は帯の徳のために去って行ったのだと話したので、聖堂参事会員は一層熱心に祈り、身体的要求が迫らない限りは教会からほとんど出ることはなかった。ついに、悪魔は居合わせた民衆に通る声で言った。「この身体から出ていくから許してくれ」。それを聞いて、見ていた民衆が神のお慈悲を涙声で哀願すると、悪魔は出ていった。それを見て、すべての民衆は、聖母のお陰で、栄光に満ちた帯に敬意を表して信徒たちの救済のためにこのようなことを行って下さる神を賛美し、称えた。

『悪魔に憑かれたトレッピオ・デル・ムジェッロの女についての別の奇蹟が続く。聖母マリアは女の口を通じて帯のことが明らかになることを望まれ、聖なる業を真似て悪い業を避けることについて、そして、彼女の名と帯の信者が獲得されるだろうと民衆にお教えになった』。

『トレッピオ・デル・ムジェッロの女の奇蹟』

その頃、悪魔に4年もの間苦しめられていた、アルプスの辺境の[17]トレッピオと呼ばれる地域出身のマリアという女が、この聖なる帯の出現と主がこの帯によって行われたことを聞きつけ、すぐに慈悲の女王に自らをゆだね、既に言及した聖ステファノの教会へと急いだ。すると、彼女の中にいる悪魔は言った。「私は彼女の旅を邪魔することはできない。なぜならマリア自らが、救済に関することを周りの民衆に告げなければならないと私に命じたからだ」。先述の教会に着くと、悪魔は民衆たちの真ん中ですべての者が驚くように突然叫んで言った。「あなた方の女王マリアは、あなた方のところにある彼女の帯の名誉のために、その帯に関して皆の間で持たれているあらゆる疑念を解かせるために私をここに遣わした」。彼はこう付け加えた。「ここにいるすべての人に言おう。私の中には真実がなく、嘘を好むのだが、命じられたことを黙っていられないのだ。あなた方、聖職者たちに言おう。血縁者の間で結婚が行われるのを許してはならない。実際、このせいで司教たちが罰せられ、このことを黙認する者たちも罰せられるのだ。利息を受け取る者、十分の一税と初物を天引きする者、他の大罪を犯した者は罰せられると言っておく」。女はアルプスで生活していたのにこれらのことや他の多くのことを教養があるふうに語ったので、彼女の言うことを聞いて見ていたすべての人は当然のことながら驚いた。どこからこのように文学的に語っているのかと質問された悪魔は、答えて言った。「私は天の生まれなのですべてを知っている。そして、もし私がわずかであれ肉体を持っていたならば、さらに改悛して救済されたのに。しかし、私は慈悲と良識を持たずに罪を犯したので、許しと憐れみを得る希望がなく、今やこのように非難されているのだ」。悪魔払いをする聖職者たちに、さらに答えて言った。「私を追い払わないと約束してくれ。あなた方に真実を言おう。あなた方の女主人マリアは、あなた方が持っている帯が彼女のものであることを保証するように、そして、その帯に敬意を表して私が取り憑いているこの身体から出て行こうとする際に、救済について民に告げるように私に命じられた。この

真実のしるしを教えておこう。私が取り憑いている身体は、日曜日の夜明け前に私が出ていくまで食べ物を摂らないだろう」。彼がこう言ったのは、土曜日の晩課の時刻だった。聖職者たちが民衆と共にいつものように夜の聖務を終えると、悪魔は激しくその身体を苦しめ始めた。すると、居合わせた人々は哀れみで心を動かされ、女のために慈悲深い涙を流しながら両手を天にあげ、彼女を悪魔から解放して下さるように絶え間ない祈りによって神に慈悲を乞うた。そして、悪魔は彼らに言った。「あなた方が始めたことを最後まで成し遂げなさい。あなた方の祈りが聞き届けられる時が近づいている。なぜなら、あなた方の女主人マリア、ミケーレ、ステファノ、他の聖者たちがあなた方と共にあり、助力しているからである」。神を賛美する者たちはますます祈りに没頭した。しかし、聖職者たちが彼に教会の情勢について尋ね、世界で当時起きていた教会分裂の原因であるアレクサンデルの党派は良いのかどうかを尋ねると、悪魔は答えて言った。「もし良くないのなら、私は追い出されてもこの身体から出ないだろう」。それから、彼らは永遠の生命をどのようにして得るのかを彼に尋ねた。彼は答えた。「孤児と寡婦たちを保護して守り、彼らを追い返してはならない。教会の財を教会に渡し、それを彼らのために守りなさい。そして、教会の財を持ち出してはならない。十分の一税と初物を公正に分配しなさい。あなた方の間にしっかりと平穏を保ちなさい。正義を遵守しなさい。哀れみを乞う者には与え、困窮する者にはもっと寛大に施しをしなさい。あなた方聖職者たちに言おう。信心深く誠実に生き、より熱心に聖務を遂行し、教会の灯りを増やしなさい。こうしたことを実際に行えば、あなた方は現世と永遠の生において多くの財を得るだろう。言いたくないのだが、さらにもう1つだけあなた方に言おう。あなた方の女主人マリアはあなた方に伝えるよう私に命じた。彼女がすべての人に約束して言うには、彼女の帯に敬意を抱き、それをいつでも覚えている者は決して水難で命を落とすことはない」。彼はさらに、付け加えた。「あなた方が願ったことは叶えられた。あなた方の女主人マリアが私にこう命じたからである。あなた方が望んだ時に、出て行くようにと」。すると、1人の司祭が、その女を傷つけないようにして出て行くようにと彼に命じた。彼は何の傷も与えずに彼女から静かに去った。ラドローネという名の彼の仲間も先に去っていた。すると、これを見て聞いていた聖職者たちと民衆は、全能の神に感謝を表して言った。「ありがたい主、イスラエルの神は、至福の栄光ある純潔の母、聖母マリアのお陰で、彼女の帯に敬意を表して人間たちの間でこのようなことを行われた」。そしてさらに、上述の少年と同じような、多くのことを他にも話すことができる。この少年は、プラート人たちが葡萄摘みの準備をしていた時に彼らに言った。「あなた方は葡萄摘みの準備をしたが、何も収穫できないであろう」。するとまさにその翌日、非常に強い雹の嵐がやって来て、葡萄を収穫できないばかりか、葡萄の葉や房のみならず木そのものがほとんど残らないほどにプラート全域で葡萄畑が壊滅した。

『プラートの伯領にあるサント・イッポリトの尼僧の奇蹟』

サント・イッポリトの尼僧に関する別の奇蹟がある。10年間苦しんだ彼女がどのようにしてプラートに到着したか、聖ステファノの祭壇の前に死んだように衰弱して横たわっていた時に、驚いたことに医者になると言ってどのようにラテン語で話したか、彼女について話さ

ないわけにはいかない。実際、彼女はアルベルティ伯の眼の炎症を自分の舌で治し、彼が聖母マリアのために彼女の帯に敬意を表して帯の前で昼も夜も明かりを灯すことができるようにとプラートの教会に多量の油を寄進した後に、彼女は解放された。だが、私達はそれらを一つずつ報告することはできないので、信者の証言として聞いている人の信仰を確かめるにはこれで充分としようではないか。これらすべてのことは神が彼の至福の母の栄光ある帯のためになさったことであり、今日に至るまでそれを行うことをおやめにならない。だから、悪魔の言うことを信じる必要はないと主張する不信心者は恥じ入るべきである。というのも、聖書が証言しているように、しばしば悪人を通じて真実のしるしが明らかにされるからである。バビロニアの王ネブカドネツァルは3人の少年を窯の炎の中に放り込ませ、彼らのうちに4人目を見たと証言している[18]。悪魔たちもキリスト本人にこう言って証言を伝えている。「神の子イエスよ、かまわないでくれ。なぜ、まだその時ではないのにここに来て、我々を苦しめるのか」[19]。愚かな人たちによって異教の偶像が崇拝されていた地方に使徒たちが入った時に、彼らについての伝説が明確に立証しているように、聖シモンとユダ、使徒マタイ、そして悪魔の偶像を通じて見せられた多くの他の者たちなどの使徒たちにも証言がもたらされた。実際、カイアファとピラトも、福音書の言葉が明示しているように、キリストについて証言をしている。

ここで、山の上に位置する都市がどのように語られるのかを簡潔に示そう。都市は聖書の高さに建設された聖母教会で、燭台の上の明かりは信仰によって燃え、言葉と行いにおいて愛によって輝く各々の忠実な魂である。信者の信仰を確かなものとするために様々な時に示される全能の神のしるしと奇蹟がそうであるように、「雉鳩と燕と鸛が鳴き声を発した」と実際に頌歌に読まれるように[20]、毎日現されることは隠されて覆われている。燕の声によりカトリック教会は洗礼に始まり、雉鳩の声によりキリストの血に捧げられ、鸛の声により使徒たちの伝道のために世界で賞賛されるのである。そして、これらのことは忠実な公証人の手で多くの敬虔な者たちの見ている前で書かれた。それらの文書からはこれらのことが引用され、何世紀もの間祝福されてきた我らが主イエス・キリストに敬意を表して、聖母と彼女の高貴な帯の賛美と徳のためにここに忠実に書き写された。アーメン。

『主の年1212年に[21]、聖母マリアの帯を盗もうとしたあるピストイア人の別の奇蹟が続く』。
『帯を盗む者についての別の奇蹟』

ムシャッティーノ・ディ・ピストイアと呼ばれるジョヴァンニ・ディ・セル・ランデットという者がおり、主の年1312年にプラートの教会から聖母マリアの帯を盗もうと考え、その教会から帯を持って出る前に奇蹟により盲目になった。そのため、現行犯で見つかってすぐに盗品と共に捕らえられ、激怒した民衆によって驢馬の尾につながれてプラートへ引きずられ、その教会の2つの扉で両手が切断された。すなわち、右手は鐘楼に近い扉によって切り落とされた。そして、居合わせた人々の１人が切断された血まみれの手を過度の熱意をもって勢いよく引きはがし、侮蔑するために投げようと思い、先述の扉の柱頭の高いところにそれをぶつけた。そこにはその手と腕の一部の血の跡と形が鮮明に残り、今日まで先述の出来事

の奇蹟としてそこにはっきりと現れており、雨、雪、雹あるいは風によっても決して消えなかった。左手は8人委員会の広場に面する扉のところで切断され、彼の身体の残りの部分はプラートの町のあちこちを引きずられ、最後にビゼンツィオ河の土手の処刑場へ運ばれ、無数の群衆の前で燃やされた。民衆がプラートの町に、そして先述の行政官の建物に戻ると、教会の身廊の、現在はその帯の礼拝堂がある所の壁に、その出来事を戒めのために描かせることになった。その物語の絵は古いにもかかわらず、注意深く観察すれば、上述のすべてのことが細部にはっきりと認められるだろう。

『こっそりと持ち去られたり盗んだりされることを防ぐ、帯の聖櫃と保管箱の新しい建設について』

そして、今後はその帯の盗難が起こり得ないように、プラートの民衆は非常に美しく豪華な宝物と、絵画の像と、銀、金、大理石、木の彫刻の像で飾られた聖母マリアに奉献した新しい礼拝堂を建設させた。そして、彫刻を施した白大理石の祭壇上には、7つの鍵で先述の帯を保管する聖櫃を作らせた。そのうちの5つの鍵は同聖堂のプラートの司祭長が管理し、残りは8人委員会と正義の旗手が保管する。そして、現在はこの祭壇には、ここで毎日ミサを挙げる責務を担う18人の礼拝堂付き司祭が付いている。

『帯の顕示にふさわしい、今日のいくつかの儀式について』

このように明らかにされた上述の帯は、さらに、先述の8人委員会と正義の旗手と12人の評議員と判事によって予め承認を得られていなければ、つまりそのためには少なくとも18人の賛成すなわち18個の空豆を獲得しなければ[22]、何びとにも決して見せてはならないと決定された。さらに、帯の顕示の後には、その聖櫃への出し入れに関する2つの記録、つまり司祭長付きの公証人たちによる記録と、8人委員会の書記官と正義の旗手によるもう1つの記録を作成することが決定された。規定集により定められた他のすべての多くのことは、冗長になるのを避けるために触れないが、毎日正確に遵守されるべきである。

『聖母マリアの帯を盗もうとしたピストイア市のムシャッティーノと呼ばれたジョヴァンニに関する、主の年1312年に宣告されたプラートのコムーネの議会の判決と裁判の記録から以下のように引用した有罪の判決と死罪の判決文』

主の御名において、アーメン。これは、プラートの誉むべきポデスタでありペルージャ市民である、気高く有力なバルド・ディ・カストロノーヴォ閣下により下記の理由で後述のジョヴァンニに関して行われ、決定され、宣告された、有罪の判決と死罪の判決文である。これは、教皇クレメンス5世の時代の第10インディクティオ[23]、主の受肉後1312年に、上述のポデスタ閣下の公証人である私フランコにより以下の形式で記録された。

先述の我々のポデスタのバルドはプラートの異邦人であるジョヴァンニ・ディ・セル・ランデット・ダ・ピストイアに対し、我々の機関と教区による調査を通じて予審を行い、私達とポデスタの前でなされた彼自身の任意の意志と自白により、後述するようなすべてのこと

を彼がプラートに対して犯し、行ったという結論に私達と私達の教区は達した。つまり、もう1ヶ月になるが、今年の今月に、彼はプラートのサント・ステファノの民の聖なる教会から、そして聖なる祭壇、聖母マリアの帯がいつも保管されている場所からその聖なる帯を取り出して持ち去り、それをフィレンツェ市に持って行った。そして、その帯の献納と寄贈により同コムーネから報いられるよう要求し、同コムーネがこうした理由で彼に与えるであろう報酬と感謝を受け取ることを計画し、期待した。彼はその企てを実行しようとし、同年同月にサン・ジョヴァンニ門の外に住んでいるある蹄鉄工のところへ行き、彼に言った。「ペンチを貸してくれ」。蹄鉄工は彼に言った。「受け取りなさい」。彼ジョヴァンニはその蹄鉄工からペンチを受け取り、次にマゼオという名の工匠のところへ行って彼からドリルを得たが、何のためにそれを得たかは言わなかった。そして、ペンチとドリルを持って先述の教会に入り、祭壇へ、あの聖なる帯のあった聖所へと近づき、その祭壇と聖帯のある場所の扉と、その場所と祭壇のすべての錠をこじ開け、覆いを取り、割った。それから窃盗と冒涜のために、口では言えないようなとんでもないやり方でその祭壇と聖なる場所から聖帯が入っていた容器を聖帯もろとも引っ張り出して持ち出し、その容器と帯を持って聖なる教会から出て、その教会から帯と容器を引っ張り出し、その容器と帯を聖なる教会から外へ持ち去り、帯をその教会の建物の部屋にあった箱に隠した。彼はこれらのことを行い、今月の2日間、つまり今月の27日木曜日と28日金曜日に実行した。そして、今月の28日金曜日にその部屋に帯を隠すと、悪いことをしたように思われたので、捕らえられないように姿を消そうと考え、市民の農場管理人であるレーゾにそのことを密かに打ち明けた。そのレーゾが司祭長代理であるサン・ドナート修道院長に話し、院長は男がそこから出て逃げ去らないようにすぐにその場所の扉を封鎖すると、彼自身が司祭長代理と前述の民の聖堂参事会員たちの前に現れて彼らに聖なる帯を返した。神と聖母マリアとその帯と教会の名誉と敬意に対して、そして名誉と繁栄に対して最大の冒涜を犯しながら、プラートのコムーネと市民に不利益となる、そして損失、侮辱、不利益となる、そして名誉と正義と多くの財の恵みの侵害となることを窃盗とこそ泥によって行った。その財の恵みは、その帯のお陰でコムーネとプラートの町の民が所有してきて、今も所有しており、将来も所有していくものなのである。こうしたことにより、プラートの民に不名誉と不祥事があったこと、あり得るということ、その民の聖職者たちと住民たちの危機があり得るということが話題にされて悪いと認められ、彼によって犯された先述の事件がプラートの地で知られ、明らかになり、有名になった。それ故に、[悪事は]どんな方法でも隠され得ないということが、前述のすべてのこと、そして他のすべてのことと同様に、より完全に我らの教区の報告書に含まれているのである。

それ故、前述のことと例の悪い行為が極悪であるとされ、プラートの町で知られ、有名になり、明らかになったので、このように重大でただならぬ悪が処罰を逃れないように、そしてその罰が戒めとして永久に他の人に伝えられるように、プラートの町の法と規定集と制度の形式に従って、そして私達がよりよくし得る方法と手段と正当性によって、裁判の法廷の権威によりその判決文において、彼が犯した前述のすべての個々のことと知られて有名になって明らかになった狂気と犯罪のために、我々は死罪の判決を下すのである。ジョヴァンニ

がプラートの町のあちこちを車に乗せずに驢馬の尾で引きずられ、その民と教会の前で、そして彼らの目の前で彼ジョヴァンニの両手が切断され、身体から離され、既に述べたように処刑場であるビゼンツィオまで引きずられて焼かれて殺されるように。

その判決と死罪の判決文は、鐘の音とポデスタ閣下に命じられた布告役人の声によりプラートの町の民の建物の前にいつも通りに民衆が集まったコムーネと民衆の広場での、プラートの町のコムーネと民衆の評議会と議会において、法廷の権威の下に同閣下によりプラートの町の民衆の建物の階段の上から通告され、公に知らされた。そして、呼ばれた証人つまりテバルド・ディ・モンテカティーニの領主ピッカルド、パチーノ・ランディ、セル・レンゾ・メルグーリ・ディ・プラート、同コムーネの布告役人ヌートとサルシッチャ、そしてその他大勢の立ち会いのもとで、主の受肉後1312年の第10インディクティオの7月28日金曜日に、ポデスタの命令で、ポデスタ閣下の公証人である私フランコにより書かれ、掲示され、公にされた。

『公証人の署名』

前述の司法官の公証人である私フランコ・モーニ・ディ・モンテカティーニは、前述のポデスタの指示で立ち会ったこれらすべての先述のことを書き、読み上げ、公にした。

『ピストイアのムシャッティーノの刑の執行』

同年のインディクティオの7月28日に、証人として呼ばれた私公証人フランコ、コムーネの布告役人ヌートとサルシッチャ、コムーネの使節フェッラモスカとレウッチョの立ち会いのもとで、ジョヴァンニは両手を切断されてから焼かれて死んだ。そのため、その人物に関する有罪判決は執行された。

【注】

1 論者は、プラートの聖帯崇拝とサント・ステファノ聖堂の13～15世紀の造形作品に関する総括的研究として、博士論文『プラートのサント・ステファノ聖堂における聖帯崇拝と14～15世紀の美術』（平成13年12月、お茶の水女子大学に於いて学位取得）を発表した。本稿では紙数に限りがあるため、プラート史や聖帯崇拝に関する研究史や参考文献については上記の拙論を参照されたい。

2 本写本はアンナ・イメルデ・ガッレッティが公刊したが、コメントは極めて簡素で不充分なものである。A.I. Galletti, Storie della Sacra Cintola (Schede per un lavoro da fare a Prato), in *Toscana e Terrasanta nel Medioevo,* a cura di F. Cardini, Firenze 1982, pp. 317-338.

3 プラートの聖帯の伝説の写本はプラートとフィレンツェに40点あまり現存する。そのうちの、14～15世紀に編纂された12のラテン語版及び俗語版のテキストについては、註1に挙げた拙論の第I部第３章「聖帯の伝説とテキスト」において詳細に分析した。

4 "DE TRANSITU BEATAE MARIAE VIRGINIS. (Transitus Mariae. A)" in K. von Tischendorf, *Apocalypses apocryphae,* Hildesheim 1966, pp. 113-123.

5 詩篇135：6

6 9時のこと。

7 雅歌2：2

8 詩篇133：1

9 使徒言行録8：38

10 ダニエル書6：17-25

11 ヨハネによる福音書20：19

12 写本では1101年となっているが、章のタイトルにある1141年のことであろう。

13 マタイ5：14-15

14 箱の中に入っている物は、聖帯だということ。

15 マタイ10：26

16 3ブラッチャは約180cm。3ブラッチャのものとは、聖帯のことを指している。

17 この時代には、アペニン山脈のことをアルプスと呼んでいた。トレッピオはピストイア北部の村。

18 ダニエル書3：25

19 マタイ8：29

20「空を飛ぶこうのとりもその季節を知っている。山鳩もつばめも鶴も、渡るときを守る」（エレミヤ書8：7）。

21 1212年と書かれているが、1312年の間違いだと思われる。

22 当時のフィレンツェとプラートでは評議会の投票を白と黒の空豆を用いて行っていた。

23 教会暦として西暦313年を元年と定めた15年循環暦算法のこと。

本稿は、註１に挙げた博士論文に別冊として添えた原典史料の一部である。ラテン語原典の訳出にあたり、東京外国語大学講師のマルコ・ビオンディ氏、東京大学文学部欧米系文化研究専攻西洋古典学講座助手の根本和子氏に数々の貴重なご教示を賜った。末筆ながら記して心より感謝致します。